



小 論 文

時 間 120 分

————— 注 意 事 項 —————

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはならない。
2. この問題冊子は 8 ページである。印刷不鮮明の箇所などがある場合には、監督者に申し出ること。
3. 解答用紙の指定欄に必ず受験番号を記入すること。
4. 解答はすべて別紙の解答用紙に横書きで記入すること。
5. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
6. 解答用紙は持ち帰らないこと。

<資料>は、児玉真美『殺す親 殺させられる親』(生活書院, 2019年)の一部である。資料を読んで、次の設問に答えなさい。

(1) 下線部①「そこにある人間観」とはどのような人間観か。説明しなさい。

(1行20字詰め, 10行以内)

(2) 下線部②「それが「意思」として言葉で表現されるや、一定の状態にある人ではこんなにも簡単に実現されてしまう」とはどういうことか。資料の具体例に即して説明しなさい。

(1行20字詰め, 20行以内)

(3) 下線部③「そういうこと」とはどういうことか。筆者の考えをまとめたうえで、それに対するあなたの考えを述べなさい。

(1行20字詰め, 30行以内)

(注意)

解答にあたっては、解答用紙の1マスに1字を使い、句読点、引用符、括弧などはいずれも1字として扱うこと。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。書き出しおよび行を改めたときには、1マス空けること。

<資料>

児玉真美 『殺す親 殺させられる親』(生活書院, 2019年)

2013年、米国テキサス州で脳死と宣告された13歳の黒人の少女、ジャハイ・マクマスは「死体」なのかという問題をめぐって激しい論争が巻き起こった。

ジャハイは扁桃腺へんとうせんの切除手術を受け、術後の大量出血から心停止を起こした。病院側は数日後に脳死を宣告し生命維持の中止を決めたが、家族はジャハイには反応があるとして提訴。ここまでは、これまでも数え切れないほど読んできた争議と似通った展開だった。私がまったく想定外だったのは、この係争事件が報道された時に巻き起こった家族へのバッシングだった。

この事件が報道されると、アーサー・カプラン、タッデウス・ポウプ、ディヴィッド・マグナスなど著名な生命倫理学者らが容赦ない批判を展開した。「医師が脳死と診断した以上、その人は法的にも科学的にも死者である」「家族は『死体』に治療をしろと要求をしている」「『死体』がベッドを塞いで、治療すれば回復する患者から医療を奪ってはならない」「死を決めることは医療専門職にゆだねられてきた。そのスタンスは変わってはならない」などと主張した。脳死が人の死かについて生命倫理で議論が続いている段階で脳死は科学的な死だと断定するのは誠実な議論とは言えずドグマにすぎないとの批判や、脳死診断の手順のバラツキを指摘する向きもあったが、とりわけポウプは「死体」という言葉を頻繁に用いた。また彼は、医師が脳死と診断した以上ジャハイは死体なのだから「生命維持」という用語も使うべきではないと主張し、「臓器保存措置」という文言を使い続けた。

そして米国世論は、そうした学者たちの批判にあおられるように、家族に対する激しいバッシングに走った。連日ネットに渦巻く非難の大合唱は、まるでジャハイの母親に向かって「あんたの娘はもう『死体』なんだよ。なんでそれが分からないんだ」と難話し、「この無知なバカめ」と愚弄するかのようだ……というのが私の印象だった。もし扁桃腺手術を受けて意識不明となったのが白人の少女だったら、米国世論はここまで激しいバッシングに走ったろうか……とも考えた。

それら非難の中心的メッセージとは、「脳死は科学的な死である」「医師が脳死と診断した以上その人は死体だと納得できないのは、親の科学に対する無知蒙昧もうまい」という

ものだった。しかし母親にすれば、ほんの数日前までは元気で暮らしていた我が子だ。その我が子が大したリスクもない手術を受けたはずなのに、あっという間に思いがけない事態から脳死と診断されたのだから、平静に受け止められるはずがないだろう。では、「科学マインドがある」ということは、元気だった我が子が思いがけない事故で突然「脳死」と診断されたとしても、冷静に「分かりました。この子はもう死体なのですね」と納得できることなのだろうか。

30年前の母子入園^(注1)で、我が子の障害を知った直後の混乱の中、私たち母親は医師やセラピストと同じく我が子を「異常な肉体」として「医学モデル」でまなざすように求められた。それと同じように、この事件では医師や生命倫理学者ばかりではなく、米国の一般世論までもが「我が子を生物学的個体と見なせ」とジャハイの母親に要求しているように見えた。

また、医師^{ほうじよ}幫助自殺の合法化をめぐる「死の自己決定権」を強力に要求する米国世論が、その一方でこうして一定の人の場合には、死を決める絶対的な権限を「科学」の名のもとに医師に委ねてはばからないことにも、釈然としないものが残った。誰が決めるかという意味では対極的な議論であるはずの「死の自己決定権」の議論と「無益な治療」論が並行して広がる事態に潜む、根深い社会的背景がそこに透けて見えるような気がした。

10年ほど素人なりに「死ぬ/死なせる」をめぐる事件と議論を追いかけながら、時代から耳元で「手間も金もかかる人のそばからは、みんなでさっさと立ち去ってしまおうや」とささやかれ続けてきたような気がしていた。この時代に、私たち人間はいったいどういう存在にされていこうとしているのだろうか、と考え込んでしまう事件だった。

英語圏の「無益」をめぐる議論を追いかけっていると、QOL^(注2)が問題となる文脈で頻繁に「意味のある人生 meaningful life」という言葉に出会う。たとえば、ウーレットの『生命倫理学と障害学の対話』第3章の事例研究の一つは、極めて未熟に生まれ、救命はできるが重い障害を負うと見込まれる新生児シドニー・ミラーのケース。シドニーの救命をめぐる生命倫理学者らの議論にも meaningful という文言が繰り返し登場する。「ダウン症その他の身体障害をもった子どもが有意の人生を送れるかどうか

か]、あるいは「積極的に治療しても、多くの未熟児は……(略)……他人との間で意味のあるかわりをもてない」などなど。

つまり、ある新生児が将来「意味のある人生」を送れるか、「意味のある関わり」が可能かどうかの判断が、その子どもを治療し救命するか、それとも治療せず死ぬに任せるかを定める基準の一つになっているのである。そんな議論に触れるたびに、でも……と心の中に沸きあがる疑問があった。でも、そもそも「有意な人生」ってなに？「意味のあるやりとり」って、一体なに……？ 生まれてきた子どもが「生物学的な個体として今現在どのような状態にあるか」が、その子の将来の QOL を決定づけるの？ その子が『有意な人生』を送ることができるかを本当に決めてしまうの……？

たとえばジョン・ロバートソンは「その新生児が言語や身振りなどのシンボルを通じたやりとりや関わりが可能な知的能力を欠いているか、欠くことが合理的に考えて確実と思われる場合には」治療をしないと決める権利が親にある、と主張する。「私たちは多くの場合、人間の価値を、言語やジェスチャーを通して他者と意味のあるやりとりをすることを含め、[自分の]利害と経験を意識できる能力においている」からだ。

ピーター・シンガーが解説する「総量」バージョンの功利主義では、「血友病の新生児を殺すことが他者に悪影響を及ぼさない限り、その子を殺すことは正しい」。なぜなら、血友病の子どもが殺されても、両親がその子が生きていたら生まなかつたはずの次の子を産むなら、その子どもの方がより良い人生を生きるため、血友病の子どもが殺されるほうが「幸福の総量が大きい」からだ。

こうした議論に触れるたび、でも……と、そこにある人間観に違和感を覚える。人をバラバラの個体として捉え、^①個体ごとの能力と機能を計量可能なものと見なして、その総和がそのままその個体の価値である、とでもいうような——。その総和に応じて幸不幸が宿命づけられている、というような——。バラバラの個体をひとつ任意に取り出してきて、科学技術でその能力をアップしてやれば、そのアップした分だけ、その個体が自動的により幸福になるはずだ、とでもいうような——。人の価値も幸福も何もかもが、足し算引き算の数式で合理的に割り出せるものであるかのよう——。

それは私にはあまりにも機械的で皮相的な人間観のように思える。人は、多くの人

と繋がって多様で複雑な関係性を切り結び、その中から生じる「私にとってかけがえのないあなた」「あなたにとってかけがえのない私」という関係性を生きる、もっと社会的、関係的な存在なのではないだろうか。そして関係性を生きるということは、合理では簡単に割り切ることができないものに取り囲まれて生きることではないのだろうか。

「かけがえがない」というのは「代替えがきかない」ということだから、誰かが憎らしくてたまらないというのだって、それもまたその人が自分にとってかけがえがない存在だということだ。愛の反対は憎しみではなくて無関心だという。無関心は相手とつながっていないけれど、誰かが憎らしくて仕方がないというのは、相手と否応なしに繋がってしまっている。憎むまいと思っても、そこは理屈ではないから頭でどうにかすることはできない。「かけがえがなさ」とは、そんなふうに理屈を超えたところにある。

私たちは誰かを恋する時、自分がなぜその人のことをこんなにも愛おしいと感じるのか、理路整然と説明することなどできない。理由が整然と説明できる恋心なんて、所詮タカが知れている。でも、そんな、理屈ではどうにも説明がつかない気持ちに私たちは翻弄されて、悶々と夜も眠れなくなったり食事も喉を通らないほど思いつめたりする。後で考えたら真っ赤になるほどバカなことをしでかしたりもする。頭の中には互いに矛盾する気持ちがいっぱいあって、その間で引き裂かれて、頭の中はしっちゃんめっちゃか、言葉にならない思いに絶句する。そして、そんな時、私たちは大切な人との間で目と目で語り合っていないだろうか。大切な人とは、手を触れ、体を触れ合うことで心を通わせていないだろうか。そこにある心の通い合いはとても豊かで大切なものだと思うのだけれど、それを科学や論理で証明することなど、できるものだろうか。その心の通い合いは、科学的に説明できなかつたら存在しないものなのだろうか。それは「意味のあるやりとり」ではない、のだろうか。そんな思いは「意味がない」ものなのだろうか。

ベルギーに、精神障害者の女性が安楽死実行予定の当日、自宅にやってきた医師に「できない(I cannot do it)」と言って意思を翻した、興味深い事例がある。2015年に複数のメディアがローラあるいはエミリーという仮名で数か月にわたって詳細に報道

した女性。1歳の時に母親が家を出ていき、父親はアルコール中毒で虐待的という機能不全の家庭だった。子どもの頃から自殺を考えつづけてきた。自傷行為もあったし精神病院への入院もあった。その後演劇を学び、24歳の現在は友人もできて独り暮らしをしているが「生きることは自分には向いていない」と感じており、ついに自宅での安楽死を決心し、必要な手続きを経て医師と実行日を決めた。

実行予定日の2週間前に、彼女は親友2人と公園にピクニックに行き、決心を打ち明ける。エコノミスト誌のビデオを見ると、親友たちはいきなりの告白に戸惑っている。すぐにもストップをかけたい気持ちと本人の意思を尊重すべきだという思いとの狭間はざまで引き裂かれ、言葉が見つからずに困っているように見える。1人がやがて思いを込めるような口調で言ったのは「……やっぱりやめようかとか、気持ちが揺らぐことはないの?」。

その2人が、安楽死実行予定の当日、ローラ【中略】を訪ねてきた。「本当にやるの?」と聞かれて、答えられなかったという。そして、夕方5時に医師がやってくると、彼女は「できません」と告げた。

おそらく彼女自身にも、自分がなぜ翻意したのかを理路整然と言葉で説明することなどできないのではないだろうか。2人の親友がそうだったように、相矛盾する思いが人の中にはたくさんあって、それが大切なことや大切な人であればあるだけ、人はそれらの思いの間で引き裂かれてしまう。それが、バラバラの個体として存在しているのではなく、様々な人との関係性の中で生きている、ということなのだと思う。「意思」が覆った背景にあった複雑な気持ちの変化を理路整然と説明することなど他人にはもちろん本人にだってできないかもしれないけれど、2週間前の公園での時間があったこと、その親友2人が当日に心配して訪ねてきたことが、彼女の翻意に影響したことは間違いないだろう。

米国には、ちょうどその逆の事例がある。「死ぬ権利」推進派の活動家で生命倫理学者でもあるマーガレット・バツティンの夫は自転車事故で四肢まひ、人工呼吸器依存となった。その夫が急変した際、本人は「死にたい」と意思表示をしていたにもかかわらず、「死ぬ権利」推進活動家のバツティンは救急救命室に運び込んでしまった。しかし「死にたい」と言っていた大学教授の夫は、やがて呼吸器をつけたまま講義を再開し、生きることを喜びと感じ始める。そんな夫婦の穏やかな生活がニューヨーク・タ

イズでビデオと記事で報道されたのは、2013年7月17日のことだった。そしてわずか10日後の27日、夫は突然に気持ちを翻し、もう明日などいないから人工呼吸器を含めて一切のスイッチを切ってくれ、と要望。モルヒネが打たれ、呼吸器が止められて、彼は死んだ。

バッティンの夫の死は最初の報道ほど大きな扱いをされなかったが、その死を知った時、私はあまりのことに茫然とした。人の心はこんなにも不安定で揺れ動くものなのだとということがショックだった。そんなにも不安定なものである人の心が一方に大きく揺れた時に、それが「意思」として言葉で表現されるや、一定の状態にある人では② こんなにも簡単に実現されてしまうのだということがショックだった。

ニューヨーク・タイムズのような大新聞に報道されて世界中の人たちから注目されたのだから、様々な反響があったことだろう。その中には意に添わない不愉快な反応だってあったことだろう。大きなライフ・イベントで「非日常」が続いているさなか、強い刺激に晒され続ける渦中の人は一時的に気持ちが張り詰めて、ハイな精神状態になりがちなものだと思う。そして、その後には揺り戻しが起こってくるものだろう。健康な人間だって日頃より気持ちは不安定になり、大きくアップダウンするものだろうに……。

「意思」と言う時、私たちはそれを感情とは切り離すことができるものとイメージする。理性的・合理的な思考によって形づくられ確認されるもの。だからそこには一貫したものがある——。そんなイメージをもっている。意思が一貫していることが理性的であることの証明であるかのように前提されがちだし、時には論理的に整合して齟齬がないことが「正しい」ことであるといわんばかりの議論さえある。けれど「意思」とは、そんなふうに常に言葉でくつきりと余すところなく表現できる、不変で強固なものなのだろうか。

本当は、言葉では拾いきれない思いや、合理で説明できない気持ちというものがある。私たちの中には沢山あって、「意思」として言葉にできるのは、常にその一部でしかないんじゃないだろうか。人の思いは「何色」と名付けられるような単色ではなく、様々な色が混じり合い、いくつもの色の「あわい」^(注3)で常にグラデーションとなって揺れ動いているものだと思う。揺らがせるのは、その時々ちょっとした出来事だったり、

人との関わりや、人のちょっとした言葉だったりする。大切なものやかけがえのない人のことであればあるだけ、私たちは互いに相矛盾する思いをたくさん抱え込んで、そこで引き裂かれてしまう。気持ちや思いがそれほどに不確かでつかみどころがないものなのだとしたら、それと完全に切り離すことなどできない「考え」や「意思」だってまた、常に揺れ動く不確かなものだろう。

私たちの気持ちや思いや意思が生起したり形を変える場所は、きっと「自分」という閉じられた内部というよりも、たぶん「誰か」と「私」との間なんじゃないだろうか。人は常に自分自身とも対話し続けているものだろうから、その「他者」の中には「自分自身」もまた含まれている。「私」が自分自身を含めた他者と出会い関係を切り結んでいるところ。自分を含めた他者とのやりとりを鏡にして「私」が「私」自身と新たに出会うところ。そこで、感情も思いも意思も形づくられては、常にまた形を変えていく。私たちがバラバラの個体でもなければ単なる「能力や機能の総和」でもなく、関係性とその相互性の中で生きる社会的関係的な存在だというのは、③ きっとそういうことなのだと思う。

(注1) 低年齢の肢体不自由児とその親(多くの場合、母親)を療育センター等の施設と一緒に入園させ、数か月間泊まり込みで機能訓練等の療育を行うプログラム。資料の筆者は、重症心身障害のある娘の母親として、このプログラムに参加した経験を持つ。

(注2) Quality of Life(生活の質)の略。

(注3) 境界、あいだ。

(問題作成の都合上、本文の一部と原注を省略し、漢数字の一部を算用数字に改め、ルビを加えた。また、注は出題者が付けたものである。)

令和3年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

行政政策学類 一般選抜 後期日程

本問は、児玉真美『殺す親 殺させられる親』（生活書院，2019年）の一部を資料として用い、その趣旨を説明することおよび、それを踏まえて自身の見解を述べることを通して、文章の趣旨を正確に把握する理解力および、資料について自身で考察し、その考えを文章に示す思考力・表現力を問うものである。

同資料は、終末期の患者や重度障害者の生と死をめぐる欧米の実例や筆者自身の経験を基に、人の「意思」や人が「関係性を生きる」ことについて論じるものであり、今日の社会の優生思想や功利主義に関する議論を想起させるものである。その点で、本問は、日頃から社会や地域の様々な事象に対して、その背景にある社会の風潮をも踏まえて当事者意識を持って向き合い、自分なりの考えを持つ努力をしてきたかが問われる内容となっている。

設問(1)では、筆者が違和感を抱いている人間観の内容を的確に要約させることを意図している。(2)では、資料が取り上げた「マーガレット・バッティンの夫」の事例についての的確に把握し、その趣旨を正確に論述させることを意図している。(3)では、筆者の主張を的確に理解し、下線部について正確に説明させることおよび、それを踏まえて自身で考察し、その考えを論理的かつ説得的に文章で記述させることを意図している。